
ジェイクという猫

野狐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ジェイクという猫

【Nコード】

N2179K

【作者名】

野狐

【あらすじ】

田舎から出てきて一人暮らしを始めた三鷹修二。ある晩修二のもとに奇妙な来訪者がやってきて・・・
ほんの少しの出来事は予測も出来ない状況の前兆だった。一体何がおきているんだ？どうして俺なんだ！

どうしようもない状況に、意思とは関係なく飲み込まれていく男の恐怖を描く作品。

その一

ここから街の中心まで行くには四十五分もかかるが、静かでないところだ。夜ともなればしんと静まりかえっている。街灯がフラフラと青白く灯っているばかりで、他に明かりらしい明かりはない。主要道から一本入った場所にあるので車の騒音に悩まされることもないし、中途半端な不良に絡まれたりすることもないのだ。

家の周りにおいてはの話だが。

壁は薄く冬の寒さは覚悟しなければいけないだろうが、少なくともこれから迎える季節にはもってこいのアパートだった。

明日は雨になるだろうが、それには興味はなかった。最近是世界中で天変地異とは言い過ぎだが、例を見ない異常気象状態だとテレビニュースのキャスターは語っている。だがそれについてもまた、三鷹修二の興味を引くには至らなかった。

築二十三年の木造アパートに住む修二は、大学へ行くために地方から出てきた。修二は自分がこれまで暮らしてきた田舎が嫌で、大学も大都市の専門学校を選び、上京し、そして一人暮らしをしている。部屋は風呂トイレ付きの（もちろんユニットバスだが）1DKで、家賃は月四万五千元。駅までは徒歩二十分だが、自転車を使えば何の苦労もない。むしろ不満があるとすれば、近くに大型の家電量販店がないことだ。修二は家電製品を見て回るのが好きだったが、最近の特にデジタルカメラの性能に感服し、惚れてもいた。その量販店はないが・・・我慢するほかなかった。

「こんな田舎町、絶対に出て行ってやる！」

そう地元では強気で周りに言いふらしていた。

友人の一人である片岡は修二言った。

「そんな田舎でもないし、お前はビビリだから都会は無理だよ」

実際にそれはほぼ、九割方当たっていた。修二の居たところは地方にしろそれなりに人は多かつたし、それは修二の都会というものに対しての劣等感の現れだったのかもしれない。少しくらい遠くても家賃は安い方がいい、と修二は言うが、修二はあまり街の中心に近いところは怖かったのだ。大都会の中で生きていけるか心配だった。ただ大都会に行きたいと強く願っていた。そしてそんな中に住まう自分の像が何よりも格好良く見えたに違いない。

台所の窓を開けると道路を挟んだ向こう側に中古で買った自分の車が止めてある。ダイハツのミラだ。なんだかんだで二十万ほどもしたが、他はもつと高かつたので結局これにした。しかし思ったより乗る機会は少ない。駅にしろ大学にしろ全く都会というのは駐車場がない。これが田舎だったら当たり前のように道路脇に止められるのに・・・修二はどちらかというと、下に止めてある鼠色の自転車の方のシートを暖めている方が長かつた。

ミラと白いシルヴィアが止めてあるばかりの月五千円の安駐車場は、駐車場とは名ばかりで実際は草が自由に伸びた荒地に等しかった。だがないよりはましだった（駐車料金の安さも言い訳にはなるのだから）。

道路の向こう側に一軒の明かりがぼつんと灯っているのが見える。中では仲のよい家族が食卓を囲んでいて今晚はすき焼きでもやっているのではないだろうか？修二は考えながら、夕飯に食べたインスタントのみそ汁を入れたお椀を洗っているところだった。コンビニ弁当の空いたトレーをゴミ箱に押し込み、ミネラルウォーターをグイとやりながら、残った洗い物を洗った。

風が吹いて台所の窓から入るのを修二は吸い込んで、そしてゆっくりとはいした。

修二は手を拭いてテレビの前に戻った。ミネラルウォーターを机の上に置いてDVDデッキのコントローラーを手に、停止しておいた映画を再生した。映画は名作「ショーシャンクの空に」だ。修二はこの作品を何度見たかは分からないが、この映画のファンと同じ

くして修二もお気に入りの一本だった。ちょうど老人の服役囚ブルックスが仮釈放されていくシーンである。このあとの展開を思うと修二の心には虚しさや悲しさが溢れ出してくる。ブルックスは外の世界での孤独に耐えられず、ついには自殺をしてしまう。

「ジェイクを養うことは出来ない、さようならジェイク」

ブルックス老人と修二は二人してそう呟いた。

テレビではブルックス老人の手からカラスのジェイクが自由な空へ飛び立った。

修二には一人暮らしをする上で三つの決まり事がある。

一つは必ず一日一回、外の空気を浴びることだ。晴れていても、雨であつても、とんでもない風が吹いていても、一度は外へ出ることにしている。草木よろしく光合成が人間にも必要だと考えていたし、それに家の中ばかりにいると滅入るのはどの人間も同じことだろう。いつかは精神がやられてその類に陥ってしまうに違いない、というのが修二の見解だった。

二つ目は台所のシンクに洗い物をためないことだ。毎晩寝る前には必ずシンクの中を空にして眠る。

最後に煙草は必ず一日一箱までということだった。それ以上はどんなことがあつても絶対に吸わない、そう修二は誓っていた（煙草などは高校二年の頃にはすでに常習となっていた修二にとって自身だらしないものに映っていた。しかし自分で思う悪習ほど止められないものはないのだ。取りあえずは減らすことにした）。

これらのルールが修二の生活にどれほどの規制を与えていたかは分からないが、修二はこれらを守ることによって一人暮らしをして自由を勝ち得たとしても、自分を抑制させる必要があると思っていた。

ふとすると窓の所で何か音がしている。修二は映画を止めてしばらく耳を澄ました。音は止んだ。気のせいだろうか。何か、窓に爪を立てるようなカリカリという音が聞こえた気がしたが。修二は顔を強ばらせてふうつとため息をついた。

修二は水を飲んで映画を見始めた。この「ショーシャンクの空に」

という映画のどこが好きかと聞かれると、希望を捨てることなく人生を生きる、だとか、辛いことがあるといいことがあるという教訓だとか教師連が鼻を高くして説教をしているような、そんなさも上品な意見がよく聞かれるが、修二は少しだけ違った。修二は、幸福と不幸が人生の中では対になっていて不幸の先には幸福があるだとか、そういう人生論は好きではない捻くれた人間で、どこか税務所の帳尻あわせのような気がしてならないのだ。修二にとっては幸福も不幸も自分の力で勝ち取るものであつたし、「ショーシャンクの空に」のアンディ・デュフレーションもまた自分の力で勝利を勝ち取つたのではないか。あの中に出てくる彼ら、レッドもノートン所長もそしてブルックスも不正を犯したり、最後は耐えられなくなり、命を絶つものもあつたが、誰もが幸福を自分で勝ち取るうともがいてる。どの人間たちも崩壊しかけの勝利のために喧嘩を売るような目で明日を睨みつけている、そんな生き方が泥臭すぎて、これが修二を引きつける要因となつたのだ。

カリ・・・カリ・・・カリ・・・

また外で何か小さな音がしている。今度は確かに聞こえる。気のせいではない。修二は剣呑な表情を浮かべて窓の方を見た。DVDを止めて、さつと身構える。音を立てないように窓に忍び寄る。DVDデッキが低く鈍い音をあげているのしか聞こえない。あとは窓の向こうの音だけしか聞こえない。

窓の外には小さな花瓶を置けるような小さなスペースが設けられており（ベランダ？出窓？そんな上品なものなんてない）、その向こうは一メートル半ぐらいの間をあけて隣のアパートの壁があるだけだ。そこに何かの気配を感じる。そんなに大きなやつではないが・・・修二はそつと近づいて、そして勢いよくカーテンを開けた。

修二は驚いて体をびくつかせ、下に置いてあつたゴミ箱につまづくと危うく転げそうになった。窓の外にいた奇妙な奴をした奴と目があつたのだ。修二には一瞬化け物か何かに見えた。幼い頃ホラー映画で見たような、人間を丸呑みにしてしまうような何かに。し

かしそれは一匹の猫だった。部屋の明かりが窓に反射して幾分見にくいその猫はすぐそこに白と黄土色をした姿で座っていて、右の前足を窓に突き立てている。カリカリというのはその音だったのだ。

「おい、どこから来たんだ？こいつは」

独りごちながら修二はもう一度窓に近づいた。首輪がないのを見ると飼い猫ではなさそうだが、毛は綺麗で、野良猫というものにも品がある気がする。修二は煙草を吸う人間特有の忙しい呼吸をしながら猫を見やった。

猫は悪びれる様子もなく（それはそうだ。彼は何もしたつもりはないのだから）じつと修二を見ている。

「どうしたんだ？お前はどうした？」修二は呟くように言った。「おい、こら、ほーらほら、ミヤーコ、タマ」

実家では柴犬のイチローを飼っているし、それに幼い頃には猫を飼っていた。そのため修二は動物が好きだった。猫は依然窓を引つ掻きながら小さく鳴いた。修二は鼻を鳴らすとにやりとして窓を開けてやった。体を乗りだして、猫に向かって手を伸ばす。猫は驚いたように身構えて修二との距離を取った。そして手が届かないところまで行くと、また腰を落ち着けて修二のことをじつと見た。

目の前の一匹の猫を見ながら修二は昔飼っていた猫のことを思い出していた。猫の名前はジェイクといった。名前の由来は「ショートジャンクの空に」（または「刑務所のリタ・ハイワース」）のカラー「ジェイク」ではなく、「ダーク・タワー」シリーズのガンズリングアのジェイク少年からとったものだ。どちらもステイブン・キングの作品だが、猫のジェイクは後者のものだった。そのジェイクは長い間生き、結局十三年か十四年くらいの大往生だった。いや、誰かがジェイクの最期を看取った訳ではない。少なくとも修二以外は。そう、ジェイクの最後・・・修二自身もはつきり確認したのではないが、あれはおよそジェイクだった。

中学三年のその日、修二は学校からいつもの道を通って帰っていた。途中の公園を通り、ショートカットして帰る道。公園へ入ろう

として何の気もなしに道路に目をやると、道路の端に猫が一匹倒れていた。およそ車に跳ねられたであろう猫は、誰か親切な人に道路の端に避けられたようだ（跳ねられてそこに至ったのかも知れないが）。虎色の体毛を血で赤く染めてぐったりしていた。死んでいることは一目で分かった。ジェイクに似たその遺体を、ジェイク自身だと修二は一瞬で悟ったが、怖くなって見ないふりをした。猫なんていくらでもいるし、もちろん同じ毛色の猫がいるのは当たり前だ、そう修二は思った。しかし震えは止まらず、公園を抜ける際にトイレに入って修二は吐いた。ジェイクは確か昨日の晩、鮭の切り身を母親にねだっていたことを思い出してもう一度吐いた。

顔を上げて壁に書かれた落書きを見た。この落書きのことは知っている。トイレを使えば誰もが見える位置にサインペンで殴り書きされた落書きは「いつになれば よくなくなる わかるきがする」と書いてあり、その下には赤色のペンで「よくならんし わからん」とコメントされている。何のことは分からないが修二は息を切らしてその落書きを見た。この古き良き悪習慣がいつの頃から行われているのかは知らないが、どこの場所へ行っても必ずと言っていいほど発見できる、言わば野良猫のようなもの、と修二は理解していた。それに高架下に捨てられたコンビ二弁当のタッパや空き缶などとも同じだと。どちらにしろ誰かがその原因を考えてまとめ、そして処理しなければならなくなるのだ。どちらかがイタチでどちらかが猟師でしかない。

結局ジェイクは帰ってこなかった。家族は心配したが、いずれ父親が「像と一緒にだ。死ぬところを見られたくなかったのだから」そう言うて家族を納得させた。それから一年後、柴犬のイチローがやってきた。

よくはなくならんさ わかりもしないさ

窓の外の猫を見ながら修二は、ジェイクとお前は違っただ、そう呟いてしばらく眺めていた。やけに人間に慣れた猫は堂々とした面持ちで、そこに座り続けていた。

どれくらい経ったろうか。「もう閉めるぞ、お前は帰れ」修二は猫にそう告げると窓を閉めた。それからカーテンも閉めて、映画の続きを見た。

その二

明くる日、修二はまたあの奇妙な音を聞き、起こされた。カーテンの向こうから、カリカリ・・・カリカリ・・・窓を引つ掻く音がする。しかもその音は昨晚よりも大きな音で、少しずつ穴でもあけているかのように思えた。無視しようかとも考えたが、それでもやはり、修二は苛立たしげに体を起こすと、眉根を下げ、しわを寄せ、欠伸をした。そして机の上のミネラルウォーターを一口飲んでから窓へと向かった。

少しきつめに言つてやろう、そうすればもう来ないはずだからな。修二は頭を掻いてカーテンの前に立った。そして勢いよくカーテンを開けると、今度は驚きが過ぎるあまりに彼は尻餅をついた。首を振りながら窓から目が離せない修二。その窓の外には昨日の猫だけではなく、さらに数匹の猫が集まっているではないか。修二は唾を飲み込んで窓まで体を引きずっていく。渴いた喉に唾液が絡んで呼吸がしにくくなる。修二は窓の錠が下がっていることに気がつく。と、慌てて錠に飛びつき鍵を掛けた。ジエイクは自分で窓を開けて部屋に入ってきていた。入った後は立派に窓も閉めて見せた。

ならば・・・

修二は素早く部屋の中を見渡すと、侵入者がいないかどうか確かめた。ウサギを狙う狐さながらの隙のない目で部屋の中を睨みつける。冷蔵庫のモーターが鈍い音をあげて修二の気をさらう。それ以外に気配は感じない・・・どうやら侵入者はいないようだ。修二はほっとすると、力が抜けるようにため息を漏らした。それからもう一度窓の前に立ち、猫たちを見やった。

一、二、三、四、どいつもこいつも自分のことを見ている、五、

六、七、いったい何なんだこいつらは、俺は別に餌も何もやっていないのに、八、九、十、どういうつもりだ？十一、十二・・・そして十三匹、全部で十三匹もいやがる。

窓の向こうにいる猫たちがまた窓を引つ掻き始めた。不快な音が耳に入ってくる。カリカリ・・・カリカリ・・・修二は拳を握って窓枠を叩いた。すると驚いた猫たちが一斉に窓から飛び退いた。しかし逃げるわけではなく、隣家との境にある塀の上に落ち着いて、色々な毛色の猫がずらりと並んでこちらを見た。その光景は修二にイチゴやブドウ、パイナップル、それにオレンジなど、色んな味の入ったサクマドロップスを連想させた。

「白いやつはハツカだ」修二はにやついて吐き捨て、それから腰を降ろして煙草に火を付けた。

窓を睨んでいるとまた猫が集まってくる。今度は少し警戒した様子で青やら黄色やらの縦に割れた猫目をぎよるつかせているが、依然としてやつらの堂々たる態度は変わらない。今度はいささか冷静になって見る事が出来た。どうして集まってきたのだろうか。考えても無駄なことだ。何も分からない。自分と猫との接点など、四年も前に別れたジェイクだけなのに。最後の姿を見たのは自分だけの、あのジェイクだけなのに。そういえば右から二番目の虎毛がジェイクに似ている、と修二は思った。お腹の中心が少し白いはずだ。もし生きていたなら、あのとき見たのはジェイクではなかったんだ。それならそれで嬉しいが・・・生きているならもう十八だなんだ。修二は煙草を灰皿でもみ消して、さらにもう一本吸った。トーストを嚙っているときも猫たちは変わらずそこにいたが、修二は近づいて、睨みつけたあと、カーテンを閉めた。

それから三日間が経ったが、相も変わらず猫たちはそこにいた。変わったことと言えば道路の向こうの駐車場に野良犬が現れたことぐらいだ。それも三匹。一匹は完全に野良犬だろうが、他の二匹はどうやら飼い犬でどこかからやって来たらしい。修二は居つくようならその内保健所に電話して引き取ってもらおう考えだった。

猫たちには魚の切り身をやった。なつかせるつもりではなかったが、猫たちが見る限りでは何も食べずにそこにいることに気がつく。と、何かやらなければ、と思ったのだ。この場所で死なれても困る。夜になつて食事を済ませた後、洗い物を終わらせ、それから生ゴミを出しに外に出た。本当は夜出すのは禁止だが、収集にやってくる八時半にどうも起きられる気がしない。修二はゴミを捨て、荒らさないように周りに油断のならない目を向けた。駐車場には犬たちがまだいるようだ。暗闇の中で黒い影がうろろしている。それから修二は道路の向こうの“幸せな家族の家”を見た。やわらかい明かりが輝いている。今晚も家族みんな夕飯をついついてるんだろう。修二は想像をめぐらせた。今晚は子供の大好きなハンバーグだろうか。父親は食後にビールをやりながら、子供たちがゲームをやるのを見ている。子供たちがきつと天才の予備軍であると、煌々とした目でうつとり見つめている。母親は洗い物をしながら明日の弁当のおかずを考えている。子供たちは何も考えていない。今が一番楽しいと思ってテレビに釘付けだろう。今晚は確か「天空の城ラピユタ」がやっていたはずだから。

頭上で音がして、修二は見上げた。電線に何羽か鳥がとまっているようだ。紺青色の夜空に小さな黒い固まりが浮かんでいるのが分かる。それに星空だということも分かる。次いで明日は晴れだということが。修二は深呼吸をして家の中へ入った。

その年は猛烈に暑かった。まだゴールデンウィークが終わったばかりだというのに半袖で歩く人は多かつたし、テレビでは和歌山で海開きが行われた、などという報道さえ流されていた。俄には信じられないニュースだ、と修二は思ったが、自分が感じるこの暑さと異常気象だという報道を思うと、なるほど、と手を打った。それに近所の街灯の下でメスのクワガタを見つけたのだ。しかしながらこれから梅雨の季節に入り、雨が降るようになるのだから信じられなかった。つまりそれほど暑かった。

修二はあまりアパートでは過ごさなかった。暑さのために窓を開

けたかったが、やつらが入ってくる気がしたし、それに外にも慣れておきたかったからだった。都会暮らしが修二の目標であり、上京してきた理由なのだから。そうあるべきだと修二は考え、外でうろろろしていたのである。

最初の猫が現れて一週間が経った日、修二は深夜勤務の飴工場での仕分けのバイトを終えて家へ帰ってくるころだった。時間は朝の六時を少し回っており、その日もクソ暑い日だった。彼はコンビニで買ったスポーツドリンクを飲みながら、自転車を走らせて行く。しかし自分のアパートの前につくと、その異様な光景に目を奪われた。自転車を降りるとその場を離れ、残された自転車はフラフラとバランスをとったあと、ボクサーのように音を立てて倒れた。早朝の道路に音が響く。

驚きのあまりに発狂しなかったことだけは運がよかったが、それでもしたからといって彼が責められるはずもない。それほどの光景だったのだ。

アパートの前には、とりわけ彼の部屋の前には異常な数の犬や猫が集まっており、それも様々な種類、野良、ペット、さらには電線には鳥たちがずらりと整列しているのだ。修二はただ呆然と立ちつくしていた。スポーツドリンクを飲んでも味がしないような気がする。いつも以上に呼吸が乱れて動悸がした。煙草を吸いたい、その衝動に駆られたが、同時に、煙草を吸うには部屋の中に入らなければならない、と妙なことも考えていた。

実際に大切なのもう誰も確認さえ出来ないということだ、と修二の頭の中で声が聞こえる。

それは自分の声だった。

その声はため息について修二自身の肩を叩いた。

お前ん家の猫が死んだかどうかなんて、お前があの日にかめな

かったから、分からずじまいできちまった。そのせいでお前の家族は生きていると信じているぞ（事故じゃなく、立派に寿命を全うしたと思いこんでるぞ）。お前は彼を捜したか？いいや、探していないね。だってお前はこっちへ出てきたじゃないか。こっちで一人暮らしをするって、飼い猫も、お前自身の故郷さえも煩わしいと置き去りにしてこっちへ。

一人きりでこっちへ・・・

何もかも置き去りにして・・・

その二（後書き）

以前投稿しました作品の中盤が、何故か抜けていることに気づきました。

投稿させていただきます。

その三

「この・・・東京へ」

修二は我に返り、辺りを冷静に見渡した。誰もいないと確認すると、情けない声で叫ぶ一步手前で己を保ち、聞こえるもう一つの声を確かめた。無感動で表情のない、冷たく突き放す自身の声を。

お前は見たんだろう？お前の飼い猫は死んだんだな？

ああ死んだだろうな。見たのは確かだ。

では何故認めていない？

認める努力はしたが、でも綺麗なままで終わらせることが出来るなら、それでも駄目か？それに、それでも認めているつもりだけだとな。

別に構わないさ。馬鹿なことではない。そんなもんだらう・・・そんな。

意識が舞い戻ってきて、咄嗟に目の前の問題を理解した。修二は瞬きもせず歩き出し、アパートの入口へ向かっていった。

「おい・・・俺の家だぞ・・・」

誰にたいした言葉でもなければ効力もない言葉だったが、修二は発して動物たちの群れに進み入る。大柄の雑種犬を押しつけてドアまで進む。足下をネズミが走り抜け、危うく踏みつけるところだった。

ようやくドアまで辿り着くと鍵を開けて中へ入った。すると部屋の中を見て修二はついに叫び声を上げた。部屋の中は何十といった猫たちに占領されていたのだ。顔を上げると窓が開いている。修二は吐いた息を吸うことも出来ず、ショックで窒息しそうになった。

動物特有の臭いが鼻について修二は何も考えられなくなる。さらにはドアを閉めることも出来ずに後ろから迫る動物たちの波に押し込まれていった。

あっという間に修二の住むボロアパートは動物で一杯になってしまった。

何が何だか分からずにもがいた修二だったが、逃げ出さなければならぬことは感じた。自分の身に危険が差し迫っていることは感じ取れる。しかしドアへ引き返すことは出来ない。修二は足下にいた黒いラブラトルレトリバーを足で避け、それからキッチンシンクに集まった猫を払いのけた。そして台所の窓から逃げ出そうと台所によじ登った。しかしそれも無駄な行為だった。

窓を開けた瞬間、何か黒い固まりが修二めがけて飛んでくる。それは修二の右肩にぶつかったかと思うと舞い上がり、タンスの上に落ち着いた。それはカラスだった。

「ジエイク！」修二は叫んだ。

窓枠を握ろうとするが、カラスがぶつかった肩が痛んで思うように手が上がらない。修二は枠をつかみそこね、動物たちの波へダイブした。下になった動物たちのお陰でそれ以上の怪我はなかったが、もう逃げ出すことは出来ない、そう直感した。

突然一匹の犬が吠えた。さっきのラブラトルレトリバーだ。するとつられたように他の動物たちも鳴き出す。犬も猫もネズミも鳩も、カラスも何もかも・・・

「止める！何だ！」修二は叫んだ。

しかし止まらない、悲鳴にも似た動物たちの大合唱。

「頼む！助けてくれ！何で・・・おれ・・・どう・・・」

動物たちの叫びは何の前触れもなく終わった。早朝の静けさが部屋を包み込む。ただ一人、修二だけは泣き出していた。涙を流し、横にいた柴犬にもたれ掛かって泣いた。何か分からないものに修二は悔いて泣いていた。

だが当然このままでは終わらない。

そしてそれはやって来た。

カタカタカタカタカタ・・・

アパートが揺れ出した。その揺れは次第に強さを増し、修二は泣くのをびたりと止めた。正確には泣くことを忘れてしまった。それは地震だった。しかもかなり強い地震だ。部屋のものが倒れだし、動物たちがざわついている。四つの足で畳の床に踏ん張りながら地震に耐えている。修二も必死に床を捕まえて耐えた。何も言葉が出ず、滝壺のような轟音が耳を襲い、どうすることも出来ない。

修二は死を覚悟していた。こんなボロアパートなどあつという間に倒壊して下敷きになってしまつだろう。揺れる中で修二は思った。多くの猫や犬の死体と一緒に自分の死体も発見される様は、奇妙な光景として残るはずだ。だが、まだ、死にたいなんて。死にたくない・・・

永遠に続くような気さえした。

どれくらいの間時間が流れたらろうか、地震は止んだ。しかし修二のボロアパートは大きな地震であつたにもかかわらず倒壊することはなかった。動物たちは一匹、また一匹とアパートから出て行つた。黒曜石の固まりのような黒々とした目を修二に向けて犬たちは去っていく。鋭い琥珀色の瞳を向けて猫は出て行つた。漆黒の闇の色をした“ジェイク”はひらりと舞つて窓を飛び出していき・・・何もいなくなつた。修二を残し、部屋からは何もいなくなつた。

そのあと地震の規模がマグニチュード六・五の大型の地震で、そこから多大な被害が出たことを知つた。修二のアパートの付近でも多くの家が半壊し、中には全壊する古いアパートもあつた。しかし修二のアパートは何ともなかったのは不思議なことだ。地脈の走り方だとか、地盤のことだとか色々と考えてみたが、無意味だったし、考えもよらないことだった。パンクしそうな回線を使って、しつこいネズミのように安否を確かめてくる家族や友人からの連絡は

面倒でならなかったが、実際の被害は何もなかった。外では倒れたコンクリート塀が乗り捨てた自転車を押しつぶしていたが、修二には何もなかったのだ。

専門学校を卒業して、それから二年間、最後には耐震性の問題で取り壊されるまで修二はアパートを変えることはなかった。片道四十五分をかけて仕事へ通った。

誰にもこのことは言わなかった。自分の中だけで納めておくつもりなのだ。どうせ誰かに言っても信じてくれやしない。あんな地震の中で運がよかったんだろ？なんて言われるのがオチだ。

修二はニヤリと笑って冷蔵庫から鮭の切り身を取り出した。そしてそれを座布団の上に座った、白と黄土色の毛色をした猫に差し出した。

「さあ、好物だろ？食っていいぞ、なあジエイク」

その三（後書き）

「ジエイクという猫」終わりです。

動物には不思議な能力があつて、人の死だとか、災害などの危険だとか、そういったものを感じ取る力があるといわれています。でもそれは動物だけにでしょうか？私は人がそれらの能力を忘れてしまっているだけではないかと思えます。

今回は短い物語でしたが、やはりここまでの短さだと主人公の人格を伝えるのは難しいですね。

感想を聞かせてもらえると嬉しいな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2179k/>

ジェイクという猫

2011年7月26日03時42分発行